

「恐れることはない」

詩 篇 第16篇6節～11節
マタイによる福音書 第28章1節～10節

説 教 岡村 恒牧師

「恐れることはない」(5節、10節)。主イエス・キリストが復活された朝、この言葉が、私たち人間の世界に響き渡りました。恐れを抱え、不安で一杯の私たちに向かって、今朝も聖書は、恐れなくてよいと語りかけるのです。

復活の朝、主イエスの墓に向かった女性たちは、恐れて当然の状況にありました。主イエスが十字架の上で死んで葬られたのは金曜日のことでした。この朝まだ暗い内に家を出て、深い悲しみを抱えたまま墓に向かっていました。その時、激しい地震が起こりました。大地が揺れ動き、墓をふさいでいた大きな石が転がります。その石の上に座った主の使いが、不思議なことを伝えました。主イエスは「もうここにはおられない」(6節)。信じられない言葉です。

ずっと主イエスと一緒に歩んできた女性たちは、主イエスのお言葉を繰り返し聞いてきました。また、人間わざではない奇跡を何度も目撃してきました。主イエスを愛し、主イエスに希望を抱いてきたこの女性たちは、主イエスの死というあまりに悲しい出来事を目撃した後、二晩を過ごし、最後の務めを果たそうとしていました。主イエスを改めて埋葬したら、もうすべてが終わり、自分の人生は深い暗闇の中にだけ続いていく。そういうあきらめの中で悲しみを抱えていたのです。

主の使いは最初に、「恐れるな」と語りかけました。主イエスの復活という出来事は、私たちが恐れから解放する出来事だったのです。悲しみや絶望、死が私たちが支配し、滅ぼしてしまうという不安と恐れの後には、最後の恐れがあります。地上の旅を終えた後、全知全能の神の前に立たなければならないのです。この最後の恐れからも私たちは確かに解放されるのです。

地上で成功し、人々に尊敬され、家族に恵まれても、なおすべてが取り去られるという深い恐れが、私たちが捕らえます。ですからこの朝、女性たちに向かって「恐れることはない」という言葉は、主の使いの口からだけでなく、主イエスご自身の言葉としても語られました。誰でも、主イエスご自身の言葉を聞いて初めて、本当の平安を得ることができからです。驚きの中で弟子たちの所へ向かう女性たちの所に、主イエスご自身がやって来て、出会って下さり、

「平安あれ」(9節)と語りかけて下さいました。

私たちはこの言葉を聞きたいのです。主イエスが「平安あれ」とおっしゃって下さる、その言葉を聞くことなしに、私たちは恐れから解放されることができないのです。主イエスは、聖書の御言葉はもちろん、さまざまな人や出来事を通して、この言葉を聞かせて下さいます。しかし最も激しく、明瞭に語りかけて下さるのは《礼拝》においてです。この時、女の人たちは「イエスのみ足をいだいて拝し」(9節)しました。

主イエスはあの十字架の上で、ご自身の命の全てを絞り出すようにして私たちのために与え尽くして下さいました。それは、私たちに会い、語りかけ、恐れから解放するだけでなく、私たちにまことの命を与えて下さるためでした。

主の使いは命じました。「急いで行って、弟子たちにこう伝えなさい、『イエスは死人の中からよみがえられた。見よ、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。そこでお会いできるであろう』」(7節)。約束の場所に行き、主にお会いして、新しい命と希望を与えられて歩み始めたら良い。聖書はこの《良い知らせ(福音)》を伝えます。今ここで、私たちが聞いているのも、この同じ福音です。主イエスにお会いして、主イエスのお言葉を聞いて罪と滅びから解放され、新しく生きるようになる。これが福音です。

私たちが自分の人生やこの世界に絶望し、暗闇の中で途方に暮れる時、聖書の約束の言葉が響きます。私たちもガリラヤに行ったら良い。主イエスがお会いして下さると約束された場所、礼拝の場所で、「平安あれ」と語りかけられて生き始めたら良いのです。「恐れることはない」と私たちが解放して下さる主の食卓について、確かな命を味わいながら生きたら良いのです。

やがて終わりの日、主イエスが再び来て下さいます。約束の場所を用意し、食卓を用意して私たちをお迎え下さいます。恐れから解放されて、確かな約束を握りしめて、終わりの日を待ち望みつつ歩みましょう。

(記 岡村 恒)